資料１

京の木生産・利用倍増アクションプラン第２回政策検討会議　議事概要

論点
　　マーケットインに対応した木材生産体制をどう構築すべきか

【話題提供】（国有林における低コスト化の取組）
○受注業者が一貫作業に慣れていない。発注の際は、伐採から植栽まで一連の作業を行わせるので、できる業者が少ない。

○コンテナ苗は需要自体が少ないことから生産量も少ない。現時点で京都府内では生産していないが、近隣県では積極的な増産の動きがある。

【議論】（マーケットインに対応した木材生産体制をどう構築すべきか）
○森林組合系統では、補助金予算の範囲内でなければ森林整備はできない。もっと安定した財源の確保が必要。事業拡大しようとすれば仕事師さんを増やす必要があるが、将来性がなければ新たな雇用はできない。なお、併せて、各森林組合の作業の効率化は必要。

○現場事業を進める､併せて経営計画のための森林所有者説明をしなくてはいけないなど､森林組合は忙しすぎる。増産したくてもこれ以上仕事が増えても手が回らない。一方で民間業者はもっと仕事ができる、といっている。森林組合は地元に密着し信頼がある。民間事業体が行っても地元はなかなか信用してくれない。ここに役割分担できれば、森林組合は現場を回すとしても、森林経営計画作成や地域の集約化をメインに、現場作業は民間にお願いするということが可能であれば、効率的に事業が進むのではないか。併せて、まだ進んでいない、森林組合と民間事業体との連携を進めるべき。

○現場の作業時間に比べて施業のプランニングに要する人手と時間はとても多くかかる。そこを改善できる仕組みを考えたい。

○道付けと、運材は外注している。現場での直営は材を切り出し道横に搬出するまで。外注ではなく、施業管理も一部担っていただければもっと変わってくるかもしれない。

○森林組合と民間事業体との協業で材も出てくるだろうしコストも下がるだろうとの話があった。完全な分業。国が考えている、森林組合は、現場作業は行わず、事業のとりまとめをし、民間事業体が現場の仕事をするというように分業をするのか、現場作業で車両系は森林組合で、架線は民間で、と棲み分けされている例もある。

○協業とは、当事者同士が同じ立場で、あるいは位置に立つもの。一部分を発注するものではないと考える。森林所有者が施業を委託するときに、両者へ委託する方法か、調整役がいて森林組合と民間事業者とをマッチングさせることとなるのではないか。

○生産量の予定が安定しないのは「マーケットインに対応した」に最大のネックである。ど

うして対応できないかというと、忙しいから。忙しい中身は、人手不足、支援制度が安定していない、安心して人が雇えない状況。申請書類作成に時間がかかる。集約化そのもののトラブルそういった対応で忙しい。そういった忙しい内容を無くしていかなければマーケットインは実現できない。
その対応には、一つは協業、これを具体的にどうしていくのかがポイント。
前回での議論でもあったが、取引にあたって、どの業者さんも森林組合さんでも同じようなやり方で書類がシンプルに作れる、ぱっとすぐに取りかかれる、というような仕組みができればそれだけで人件費が削減できる、事務自体の効率化が図られて、材価は変わらなくても生産コストの削減ができる。そういう中で材の信用ができあがっていけば材価も上がる。という部分でつながっていくのではないか。

○具体的な現場をつくっていただきたい。森林組合との協業をやってみてマニュアル化、パターン化して欲しい。それをみんなで検討したい。治山事業などの事業の中で行うのが良いが、研究として行うのでも良い。やり方が分かるようになる。

○プランナーを増やすにしたら、コストがかかる。プランの手間を省かない限り出材を増やしてもメリットにはならない。ネックは、作業するまでの道などの基盤整備が遅れていること。また、所有者を確認するため、登記簿を上げるだけでも多額にかかる。手間と経費がかかる。道作りにも書類が必要で手間がかかる。それ全てを森林組合がコーディネートしていくとなると、大変な手間がかかる。そのような情報も含めた基盤整備に、行政が手をさしのべていただければスピードアップが図れるだろう。

○最近は市町村に権限が移っているので、そのあたりも見据えた施策を検討いただきたい。

○生産量を増やすには皆伐をすれば良い。一貫作業システムで再造林も安くする必要がある。

○補助金のあり方は重要。皆伐には補助金を出すべきでないという意見があるが、九州の県では、森を変えるという視点で補助金を出し始めた。京都府でどうするのかは、森づくりの考え方次第である。ただし、材を出すために安易な皆伐は非常に危惧される。慎重に。

○皆伐は、どのみちしなければならない。ただし、再造林は、スギ、ヒノキなのか、採算が合わない林地にヒノキを植えてどうするのか。別の樹種等を考えていくことも大事。プランニングについては、時間がかかりすぎる。森林情報をどう取り扱うか、簡便にネット上で出来ればいいと考えている。それを、川上中下で使えるのであればそれが一番良い。そういう情報システム作りが必要である。

○山にはいろいろな木がある。中には高価に扱われる木もある。そういう木も必要であるので、規模は小さいかもしれないが、そういった流れも確保しておくことも大切。

○海外の事例では、並材は徹底してコストを下げる。木を測るのはハーベスタのデータのみ。測り直さない。広葉樹の大径材など、村の製材所で丁寧に引く木材は、丁寧に扱われている。要望がうまく回るようにされている。そのような仕組みは目指す姿として考えておかないといけない。今の状況だけを考えるだけでは迷走してしまう。